

1次経済 2010年 秋試験対策 セミナー

TAC証券アナリスト講座

経済担当：小川

はじめに — 1次経済本試験の概要

- 試験時間は90分、90点満点。
- 問題数は概ね55問程度。
- 証券アナリスト協会が公表している合格率は、40%台後半（5割弱）程度。
- 大問は4つ。配点ウェイトは以下の通り。

【大問別の配点ウェイト】 新プログラム試験以降

	19年春	19年秋	20年春	20年秋	21年春	21年秋
第1問 ミクロ経済学	19%	20%	24%	26%	27%	27%
第2問 マクロ経済学	43%	44%	40%	38%	39%	39%
第3問 金融論	20%	16%	16%	16%	13%	14%
第4問 国際金融論	18%	20%	20%	21%	21%	20%

- 第1問（ミクロ経済学）は、平成19年春から始まった新プログラム試験で初めて導入された。
- 最も配点が高いのは第2問（マクロ経済学）であり、単独で約4割を占める。
- マクロ経済学の知識は、続く第3問（金融論）や第4問（国際金融論）の基礎にもなっている。

各分野の概要

① ミクロ経済学

- 個人や企業の経済活動についての意思決定（＝選択）や、財やサービスが取引される市場の役割とそのメカニズムについて学習する。
- キーワードとしては、需要曲線、供給曲線、市場均衡、消費者行動、企業の生産活動、不完全競争市場、余剰分析、市場の失敗、等が挙げられる。
- さらに、異時点間の効用を最大化する個人による「将来の消費＝貯蓄」の決定（異時点間消費理論）、将来の結果が不確実な状況での選択（不確実性下の選択）が取り上げられる。
- 他の経済主体の行動を勘案して意思決定が行われるケース（ゲーム理論）や、情報が十分に行き渡っていない場合の意思決定（情報の経済学）も試験範囲に含まれる。

② マクロ経済学

- マクロ経済学とは、一国経済を巨視的な（マクロな）観点から眺めて、その仕組みを分析する分野であり、一国全体の経済、金融が分析の対象になる。
- 国民所得統計（GDP）、IS-LM 分析、AD-AS 分析、フィリップス曲線、経済成長理論、等が取り上げられる。
- マクロ経済学は、本試験における配点ウェイトが最も高く（約4割）、続く2分野（金融論、国際金融論）の基礎にもなるため、幅広く学習しておく必要がある。

③ 金融論

- 金融論では、金融の基本的な機能とともに、日本の金融市場、金融政策の主体である中央銀行の機能・組織、金融政策の運営、等が取り上げられる。
- 他の分野と比較して暗記事項が多いので、ここは直前期に集中して問題演習を行うことである程度対応可能であろう。

④ 国際金融論

- 国際金融論では、国際収支や外国為替レートの見方、理論的な決定要因の学習が中心である。
- 実質為替レート、金利平價説、購買力平價説、等の考え方と、それらを応用した理論モデルが紹介される。
- 外国との経済取引が一国の経済活動水準に及ぼす影響や、経済活動の国際的連関などの「国際マクロ経済学」は、2次レベル試験で取り上げられる。

問題例 国民経済計算に関する次の記述のうち、正しいものを選びなさい。

- A 炊事・洗濯などの家事労働が増加すると、GDP（国内総生産）は増加する。
- B ある年度の生産と所得が 500 兆円である場合、支出は 500 兆円を下回る。
- C 製品に売れ残りが発生して在庫が増加すると、GDP は減少する。
- D 外国企業が日本で生産した付加価値は、日本の GDP に計上される。

解答 D

解説

- A 正しくない。家事労働は市場取引されないもので、GDP には計上されない。
- B 正しくない。ある年度の生産と所得が 500 兆円である場合、支出も 500 兆円となる（三面等価の原則）。
- C 正しくない。在庫の増加は、その期の生産の増加を意味するので、GDP は増加する。
- D 正しい。GDP（国内総生産）は「国内概念」で集計される。日本企業であっても外国企業であっても、日本で生産された付加価値（所得）は日本の GDP に計上される。